

# 幼稚園児と小1の仲間内地位，孤独感， 社会的行動特徴の同時的関連と縦断的関連

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成8年9月30日受理)

## Concurrent and predictive correlations among sociometric status, loneliness, and behavioral characteristics in kindergarten and grade one children

Kenichi MAEDA

子どもの仲間関係の研究では，ソシオメトリック法に基づく仲間からの拒否が，現在の適応問題だけでなく，将来の適応問題をも予測する1つの妥当な指標であると指摘されている(Hymel & Rubin, 1985; Kupersmidt, Coie, & Dodge, 1990; Parker & Asher, 1987)。ソシオメトリック測度の予測的価値が認められるにつれて，ソシオメトリック指名法に基づく2次元分類システムを使用して，人気児，拒否児，無視児などのソシオメトリック地位を分類する研究が急増してきた(Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993)。特に，仲間から拒否されやすい子どもは，認知的・情緒的・社会的な発達を促進する社会的経験に乏しく，対人関係を円滑にする社会的スキルに欠けていると指摘されるようになり，多くの予防的介入あるいは早期介入プログラムは拒否児を介入指導の標的児としている(Ladd & Asher, 1985; Oden & Asher, 1977)。しかし，拒否児のすべてが予防的介入や早期介入を必要とするわけではなく，仲間からの拒否が長期的に安定したものか，それとも一過的なものかによって異なってくると考えられる(Parker & Asher, 1987)。

時間の経過に伴うソシオメトリック測度あるいはソシオメトリック地位の安定性は，これまで次の2つの方法によって検討されてきた。その第1は，1回目のソシオメトリック測定時点において人気児，拒否児，無視児などの地位群を分類し，それぞれの地位群の子どもが2回目以降のソシオメトリック測定時点において同一の地位群に分類される比率(%)を算出して，どの地位維持率が高いかを比較する方法である。第2は，地位群に分類しないで，1回目と2回目以降のソシオメトリック測度間で相関係数を算出することによって，測度の信頼性あるいは安定性を検討する方法である。前者の方法は各地位群の安定性を区別して検討できるが，人数分析であるため分類前に多数の子どもを対象にしないと各地位群の人数を十分に確保するこ

とができないという弱点がある。後者の方法は地位群別に地位の安定性を検討できないが、地位群に分類しないので測定した対象児全員のデータに基づいてソシオメトリック測度それ自体の安定性を検討できるという利点がある。

前者の方法を使用した研究は2次元分類システム (Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982; Newcomb & Bukowski, 1983) の開発以後の研究であるため、比較的最近であり、後者の方法を使用した研究よりも数少ない。たとえば、Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) は、幼稚園児時点における拒否児の約35%が小1時点においても拒否児の地位を維持することを見出している。しかし、もう少し高学年の児童を対象とした Coie & Dodge (1983) によると、小3時点における拒否児の47%が1年後の小4時点において拒否児の地位を維持し、拒否児の38%が2年後の小5時点においても拒否児の地位を維持していた。同様に、小5時点における拒否児の52%は1年後の小6時点において拒否児の地位を維持し、48%が2年後の中1時点においても拒否児の地位を維持していた。これらの研究結果は、拒否児の地位は数年にわたって維持されやすいが、その維持率は期間が長くなるにつれて低下すると同時に、高学年ほど拒否児の地位維持率が高くなることを示唆するものである。ところが、前田 (1995) の研究 I は幼稚園の年中児時点 (1年目) から年長児時点 (2年目) にかけて集団メンバーが同一のクラスを対象にしたところ、2年目の拒否児の54%は1年目も拒否児であることを見出している。前田 (1995) の研究 II では、幼稚園の年長児時点 (1年目) から小1時点 (2年目) にかけて集団メンバーが異なる集団を対象にしたところ、2年目の拒否児の45%は1年目も拒否児であることを見出している。前田 (1995) の結果は、1年目から2年目にかけて集団メンバーが同一の場合には幼児でも拒否児の地位維持率が高いこと、集団メンバーが同一か否かによって拒否児の地位維持率が異なってくることを示すものである。

後者の方法を使用した研究は、前者の方法を使用した研究よりも古く、研究数も多い。たとえば、Wasik (1987) は、5歳の幼稚園児49名を対象にしてソシオメトリック指名法と評定法を5か月間の期間をはさんで2回実施している。その結果、各得点の安定性係数はいずれも有意であり、相関値が最も高いのは平均評定値 ( $r = .80, p < .001$ ) であり、次に社会的好み (SP) 得点 ( $r = .77, p < .001$ )、否定的指名 (D) 得点 ( $r = .76, p < .001$ )、肯定的指名 (L) 得点 ( $r = .57, p < .001$ ) の順に低下し、社会的影響力 (SI) 得点 ( $r = .48, p < .001$ ) が最も低かった。Poteat, Ironsmith, & Bullock (1986) も3歳~5歳の幼児85名を対象にして、ソシオメトリック指名法と評定法を約7週間 (5週間~9週間の範囲) の期間をはさんで2回実施している。その結果、各得点の安定性係数はSP得点 ( $r = .72, p < .0001$ )、平均評定値 ( $r = .67, p < .0001$ )、D得点 ( $r = .66, p < .0001$ )、L得点 ( $r = .64, p < .0001$ )、SI得点 ( $r = .43, p < .0001$ ) であった。前田 (1989) は約4か月間の期間をはさんで各得点の安定性係数を求めたところ、年中児 (N=32) ではSP得点 ( $r = .72, p < .01$ )、D得点 ( $r = .72, p < .01$ )、L得点 ( $r = .55, p < .01$ )、SI得点 ( $r = .49, p < .01$ ) であり、年長児 (N=29) ではSP得点 ( $r = .72, p < .01$ )、L得点 ( $r = .70, p < .01$ )、D得点 ( $r = .59, p < .01$ )、SI得点 ( $r = .37, p < .10$ ) であった。また、前田 (1989) は2年間にわたって集団メンバーが同一の集団 (N=30) を対象にして、年中児時点から年長児時点にかけて約1年間の期間をはさんで各得点の安定性係数を求めている。その結果、各得点の安定性係数はSP得点 ( $r = .68, p < .01$ )、D得点 ( $r = .68, p < .01$ )、L得点 ( $r = .61, p < .01$ )、SI得点 ( $r = .61, p < .01$ ) であった (N=30)。これらの研

究結果は、数週間から数か月の期間を経ても、あるいは同一集団の場合は1年間の期間を経ても、幼児のソシオメトリック地位得点が比較的安定していることを示すものである。

児童を対象とした Coie & Dodge (1983) の研究では、小3から小4の1年間および小3から小5の2年間の安定性係数がSP得点(順に  $r = .65$ ,  $r = .43$ ), D得点(順に  $r = .54$ ,  $r = .62$ ), L得点(順に  $r = .57$ ,  $r = .27$ ), SI得点(順に  $r = .40$ ,  $r = .48$ )であることを見出している。また、小5から小6の1年間および小5から中1の2年間の安定性係数はSP得点(順に  $r = .70$ ,  $r = .36$ ), D得点(順に  $r = .71$ ,  $r = .27$ ), L得点(順に  $r = .50$ ,  $r = .29$ ), SI得点(順に  $r = .44$ ,  $r = .16$ )であった。もっと多数の児童(N=1119)を対象とした Terry & Coie (1991) の研究では、小3から小4の1年間、小4から小5の1年間および小3から小5の2年間のそれぞれについて各得点の安定性係数を求めている。その結果、それぞれの期間の安定性係数はSP得点(順に  $r = .52$ ,  $r = .56$ ,  $r = .46$ ), L得点(順に  $r = .53$ ,  $r = .52$ ,  $r = .45$ ), 平均評定値(順に  $r = .48$ ,  $r = .47$ ,  $r = .46$ ), D得点(順に  $r = .37$ ,  $r = .51$ ,  $r = .32$ ), SI得点(順に  $r = .35$ ,  $r = .41$ ,  $r = .29$ )であった。この2つの研究結果はどちらも、小3以上の児童では1年間の期間を経てもソシオメトリック地位得点が比較的安定していることを示している。しかし、2年間の期間を経た安定性係数の結果は両研究間でかなり異なっている。Terry & Coie (1991) の研究では、1年間と2年間という期間の長さによる相違はいずれの地位得点でもあまり見られない。それに対して、Coie & Dodge (1983) の研究では、同じ2年間の安定性係数でも小3から小5の2年間よりも小5から中1の2年間の方が大きく低下している。この結果の相違は、小学校では学年の進行に伴ってクラスが異なるとしても学年全体のメンバーが同一であるのに対して、小学校から中学校への移行では学年全体のメンバーに大きな変化が生れるからではないかと考えられる。

本研究では、幼稚園から小学校への移行期に焦点をあて、幼稚園の年長児時点から小1時点の1年間における安定性係数を検討することにした。この時期は Coie & Dodge (1983) の小学校から中学校への移行期と同様に、学年全体のメンバーに大きな変化が生まれる移行期である。残念ながら、Coie & Dodge (1983) では小学校から中学校への移行期を扱いつつながら、小6から中1までの1年間の安定性係数については報告していない。Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) は、幼稚園から小学校への移行期を対象にした数少ない研究の1つである。彼らは幼稚園の年長児300名を対象にして、幼稚園時点と小1時点の2回にわたって、ソシオメトリック指名法と評定法を実施している。その結果、約1年間の期間をはさんだ各得点の安定性係数はSP得点( $r = .50$ ,  $p < .01$ ), D得点( $r = .45$ ,  $p < .01$ ), L得点( $r = .41$ ,  $p < .01$ ), 平均評定値( $r = .34$ ,  $p < .01$ ), SI得点( $r = .23$ ,  $p < .05$ )であった。Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) の結果は、移行期の1年間においても、地位得点によっては比較的安定していることを示している。本研究ではソシオメトリック地位得点だけでなく、子どもの社会的行動特徴を仲間がどのように見ているか(仲間知覚)および子どもの孤独感をあわせて測定した。また、本研究では Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) と違って、各測度の1年間にわたる縦断的関連度だけでなく、2つの時点における測度間の同時的関連度もあわせて検討することにした。なお、本研究の地位群分類に基づく群間比較の結果はすでに前田(1995)の研究Ⅱに報告している。

## 方 法

**対象児** 愛媛大学教育学部附属幼稚園の年長児時点（1年目）と愛媛大学附属小学校の1年生時点（2年目）の両調査データが揃っている子ども59名（男児29名と女児30名）を対象とした。彼らの平均年齢と年齢範囲は年長児時点が6歳3か月（5歳8か月～6歳8か月）で、小1時点が7歳3か月（6歳8か月～7歳8か月）であった。幼稚園年長児時点では学年全体の人数が約60名であったが、小学1年生ではクラス数も1クラス当りの人数も増加し、合計約120名となった。このうちの約半数が幼稚園から小学校へ進学した子どもたちである。小学1年生は3クラスに分かれるので、対象幼稚園から進学した子どもは数名ずつ同じクラスに所属するが、クラス全体は新しく編成されている。

**手続き** 孤独感の調査を除く以下の調査は、幼稚園年長児時点（11月）と小1時点（12月）の2つの時期に実施した。年長児時点では以下のソシオメトリック指名法、ソシオメトリック評定法、仲間知覚指名法をそれぞれ個別面接で実施した。なお、年長児時点の調査ではすべて、各幼児の上半身を撮影した個別カラー写真を使用した。写真は一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5cm×横4cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を縦6.5cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて個別写真カードを作成した。

小1時点では、これら3つの調査に孤独感の調査を加えた4つの調査を放課後の約1時間を利用し、3クラスとも同時間にクラス単位で集団で実施した。なお、調査にあたっては、最初に調査目的の要点を説明した後、子どもの回答は秘密厳守することを告げ、近くの友達と見せ合ったり、相談しないように注意を与えた。また、どの質問についても当てはまる子がいない場合や記入したくない場合は書かなくてもよいことを十分に理解させてから、調査への協力を求めた。

(1)ソシオメトリック指名法：年長児時点では個別に、対象児を除く同性仲間全員の写真カードを机の上にランダムに縦4枚×横4枚に配列し、次の教示を与えて肯定的指名を3名以内まで選ばせた。「この中で、〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたい子は誰ですか？」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名以内まで選ばせた。「今度は、この中から〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたくない子は誰ですか？」

小1時点では、クラスの男子には男子全員の名簿を、女子には女子全員の名簿を印刷して渡し、「あなたが小学校で一緒に遊びたい子」（肯定的指名）と「あなたが小学校で一緒に遊びたくない子」（否定的指名）をそれぞれ3名以内ずつ選んで、その名簿番号を回答欄に記入させた。

(2)ソシオメトリック評定法：年長児時点では、まず机の上に3つの分類箱を横一列に配置した。各箱の底面積は縦12cm×横12cm、3つの側面の高さが5cm、残り1側面の高さが12cmであった。高さ12cmの内側面に3色の色画用紙に描いたハッピーな顔（ピンク色）、ニュートラルな顔（黄色）、悲しそうな顔（青色）の表情略線画を貼り付けてあった。対象児から見て右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。次に、同性仲間全員の写真カードをランダムな順に束ね、写真カードを1枚ずつ対象児に手渡し、幼稚園で一緒に遊びたい子の写真カードはハッピーな顔の箱に、遊びたくない子の写真カードは悲しそうな顔の箱に、遊びたいか遊びたくないか分からない子の写真カードはニュートラルな顔の箱に、

それぞれ分類させた。

小1時点では、クラスの同性仲間全員の名簿を印刷した用紙を渡し、「あなたはクラスの友達と、どのくらい一緒に遊びたいと思っていますか」と質問して、同性仲間全員について3段階で評定させた。評定方法は「遊びたい子」には◎を、「あまり、遊びたくない子」には△を、「どっちかという、遊びたい子」には○を付けさせた。

(3)仲間知覚指名法：年長児時点では、同性仲間全員の写真カードを机上にランダムに縦4枚×横4枚に配列して提示した。その中から対象児自身の写真カードを取り出して対象児の左横に置き、残りの写真カード全部を指さしながら、次のように教示した。「ここに、△△組(対象児の組名)のお友達の写真がありますね。これから、△△組さんの中で、こんなことするお友達は誰かな?と○○ちゃんに聞いていきますから、わかったらその子の写真を指さして教えてください。」この後、表1の9項目について質問しながら、それぞれの項目に該当すると思う仲間の写真カードを3名以内ずつ選ばせた。その際、対象児が指さした仲間の写真カードはその都度裏返して置き、残りの写真カードの中から2番目、3番目の仲間写真カードを選ばせていった。

表1 仲間知覚得点の因子分析の結果(年長児時点N=59)

項目	仲間知覚指名法の質問内容	因子				h <sup>2</sup>
		I	II	III	IV	
1.	お友達にあまり話しかけない子	-.360	.860	.036	-.076	.876
2.	よくけんかをする子	-.252	.098	.401	-.784	.849
3.	みんなと仲良く遊ぶのが上手な子	.857	-.162	-.117	.231	.828
4.	自分の思いどおりにならないと、すぐに怒る子	-.156	.063	.727	-.608	.927
5.	友達に親切で、やさしい子	.920	-.117	-.136	.031	.879
6.	おとなしい子	.125	.616	-.317	.253	.559
7.	お友達によく命令をする子	-.085	-.152	.830	-.173	.750
8.	お友達とあまり遊ばない子	-.249	.805	.011	-.270	.783
9.	みんなから人気がある子	.812	-.152	-.033	.136	.702
	平 方 和	2.543	1.866	1.513	1.230	7.152
	寄 与 率	.283	.207	.168	.137	.795

表2 仲間知覚得点の因子分析の結果(小1時点N=59)

項目	仲間知覚指名法の質問内容	因子			h <sup>2</sup>
		I	II	III	
1.	自分からあまり話しかけない子	.021	-.197	.706	.538
2.	自分から言い争いやけんかをしかける子	.936	-.175	-.067	.911
3.	たくさんの友達と仲良く遊ぶのが上手な子	-.150	.837	-.139	.743
4.	自分の思いどおりにならないと、すぐに怒る子	.918	-.113	.002	.855
5.	友達に親切で、みんなのことをよく考える子	-.131	.806	.040	.668
6.	おとなしくて、あまり目立ちたがらない子	-.265	.021	.632	.470
7.	他の子によく命令する子	.711	.053	-.030	.509
8.	友達とあまり遊ぼうとしない子	.117	.148	.769	.627
9.	みんなのリーダーとなって、友達をうまくまとめる子	.088	.892	.057	.807
	平 方 和	2.355	2.255	1.519	6.128
	寄 与 率	.262	.250	.169	.681

小1時点ではクラスの同性仲間全員の名簿を印刷した用紙と表2の9項目の質問を印刷した用紙を渡し、各項目に該当する同性仲間の名簿番号を3名以内ずつ回答欄に記入させた。

(4)孤独感評定法：Asher & Wheeler (1985)を参考にして、表3に示す11項目を用意し、各項目について3段階で自己評定させた。孤独感評定法の実施にあたっては、まず最初に「あなたは、アイスクリームが好きですか」と「今日の朝ご飯はパンを食べましたか」の2つの質問を実施し、回答の仕方を理解させた。また「お家ではテレビをたくさん見ますか」、「絵を描くのは好きですか」、「運動場で遊ぶのは好きですか」の3つの質問を表3の孤独感質問項目2または3項目ごとに挿入した。

表3 孤独感の自己評定項目

項目	質問内容
(1)	小学校で、新しいお友達とすぐに仲良くなれますか。
(2)	小学校で、お話するお友達はいですか。
3	小学校で、一人ぼっちだと思いますか。
(4)	小学校で、お友達と仲良く遊んでいますか。
(5)	小学校では、たくさんお友達がいいますか。
6	小学校では、お友達がいなくて淋しいですか。
(7)	小学校で遊ぶとき、すぐに遊び友達が見つかりますか。
8	小学校で、仲良しの友達をつくるのは難しいですか。
9	小学校で、みんなから仲間はずれにされていると思いますか。
(10)	誰かに手伝ってほしいとき、頼めるお友達はいいますか。
(11)	お友達は、あなたのことを好きだと思いますか。

( ) 付きの項目は得点の方向を逆にして得点化した。

**得点化の方法** (1)ソシオメトリック指名法の得点：年長児時点では、まず対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。肯定的指名数と否定的指名数のそれぞれの合計数について本人を除くクラスの同性仲間数(13名～15名)で除算し、仲間一人当たりからの指名数を算出した。その後、男女別に2クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点(肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点)から、社会的好み得点( $SP=L-D$ )と社会的影響力得点( $SI=L+D$ )を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度をあらわす。SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差をあらわし、SI得点は好かれるか拒否されるかにかかわらず仲間への影響力が強いことをあらわす。

小1時点ではクラスの同性仲間数が16名～19名の範囲に変わる点およびクラス数が3クラスになる点を除けば、得点の算出方法はすべて年長児時点と同様であった。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：年長児時点では、対象児ごとに、仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。本人を除く同性仲間数は13名～15名の範囲であるから、評定値の合計得点は最小13点～最大45点の範囲にわたる。この合計得点を評定した同性仲間数で除算して仲間一人当たりからの平均評定値を算出した。

小1時点では、対象児ごとに、仲間から◎を付けられた場合に評定値3を、○を付けられた場合に評定値2を、△を付けられた場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。本人を除く同性仲間数は15名～18名の範囲であるから、評定値の合計得点は最小15点～最大54点

の範囲にわたる。この合計得点を評定した同性仲間数で除算して仲間一人当りからの平均評定値を算出した。この平均評定値は各対象児が多数の仲間から実際に受容されている程度を集約した一次元の指標であり、得点が高いほど仲間からの受容度が高いことを意味する。

(3)仲間知覚尺度得点：L得点と同様に、項目ごとに同性仲間一人当りからの指名数を求め、それを標準得点に変換した。まず年長児時点(N=59)における各項目の標準得点に基づいて、9項目に関する主因子分析を行った。表1は、年長児時点における直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。表1から、因子負荷量の絶対値が.40以上の項目に注目すると、第I因子は項目3、項目5、項目9の3項目から成っている。これら3項目は、いずれも社交性や友好性と関連するので、第I因子を「社会的コンピテンス」因子と命名した。第II因子は項目1、項目6、項目8の3項目から成っている。これら3項目は、いずれも孤立性や対人的消極性と関連するので、第II因子を「引っ込み思案」因子と命名した。第III因子は、項目2、項目4、項目7の3項目から成っている。これら3項目は、対人的攻撃性と関連するので、第III因子を「攻撃性」因子と命名した。第IV因子は項目2と項目4から構成されるが、第III因子を構成する項目と重複し、いずれも負の因子負荷量であることから、第IV因子は以下の分析では取り扱わないことにした。なお、対象児ごとに第1因子から第III因子までの各因子を構成する3項目ずつの標準得点を合計した後、その平均値を求めた。この平均値を再度、男女別に標準得点へ変換し、攻撃性尺度(以下AG尺度と略す)得点、社会的コンピテンス尺度(以下SC尺度と略す)得点および引っ込み思案尺度(以下WD尺度と略す)得点の3つの仲間知覚尺度得点を構成し、以下の分析で使用した。

表2は、小1時点(N=59)における各項目の標準得点に基づいて、表1と同様に9項目に関する主因子分析を行い、直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。表2では、因子負荷量の絶対値が.60以上の3項目ずつから、各因子が構成されていた。表1の因子名と対応させて、項目2、項目4、項目7の3項目から成る第I因子を「攻撃性」因子と命名した。同様に、項目3、項目5、項目9の3項目から成る第II因子を「社会的コンピテンス」因子と命名し、項目1、項目6、項目8の3項目から成る第III因子を「引っ込み思案」因子と命名した。なお、年長児時点と同様に、対象児ごとに各因子別に3項目ずつの標準得点の平均値を男女別に再度標準得点へ変換して、攻撃性(AG)尺度得点、社会的コンピテンス(SC)尺度得点および引っ込み思案(WR)尺度得点の3つの仲間知覚尺度得点を作成した。

(4)孤独感得点：11項目の自己評定値を加算し、その合計得点を孤独感得点とした。項目1, 2, 4, 5, 7, 10, 11は逆転項目であり、評定値3を1点、評定値2を2点、評定値1を3点へと変換して加算した。したがって、孤独感得点は11点~33点の範囲にわたり、高いほど孤独感が強いことを意味する。

## 結 果

### 各得点間の同時的関連

#### (1) 男女全体のデータに基づく同時的相関係数

ソシオメトリック地位得点として指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点および評定法の平均評定値を使用し、それぞれと3つの仲間知覚尺度得点および孤独感得点との同時的関連をPearson積率相関係数によって示した。表4は、年長児時点の男女全体(N=59)と小

表4 各得点間の同時的相関係数

	指名得点			平均 評定値	仲間知覚尺度得点			孤独感 得点
	D	SP	SI		AG	SC	WD	
(1) 指名法の肯定的指名 (L) 得点								
年長全体(N=59)	-.409**	.840***	.545***	.616***	-.285*	.835***	-.374**	
小1全体(N=59)	-.390**	.792***	.409**	.595***	-.271*	.663***	-.048	-.199
(2) 指名法の否定的指名 (D) 得点								
年長全体(N=59)		-.839***	.542***	-.836***	.878***	-.452***	.115	
小1全体(N=59)		-.871***	.681***	-.744***	.754***	-.208	.232+	.163
(3) 指名法の社会的好み (SP) 得点								
年長全体(N=59)			.002	.865***	-.692***	.766***	-.291*	
小1全体(N=59)			-.234+	.811***	-.644***	.491***	-.179	-.214
(4) 指名法の社会的影響力 (SI) 得点								
年長全体(N=59)				-.201	.545***	.353**	-.239+	
小1全体(N=59)				-.264*	.532***	.321*	.192	.003
(5) 評定法の平均評定値								
年長全体(N=59)					-.736***	.661***	-.272*	
小1全体(N=59)					-.542***	.508***	-.435***	-.150
(6) 仲間知覚の攻撃性 (AG) 尺度得点								
年長全体(N=59)						-.335*	-.020	
小1全体(N=59)						-.156	-.079	.227+
(7) 仲間知覚の社会的コンピテンス (SC) 尺度得点								
年長全体(N=59)							-.314*	
小1全体(N=59)							-.021	-.041
(8) 仲間知覚の引っ込み思案 (WD) 尺度得点								
年長全体(N=59)								
小1全体(N=59)								.021

+:  $p < .10$  \*:  $p < .05$  \*\*:  $p < .01$  \*\*\*:  $p < .001$ 

1時点の男女全体 (N=59) の結果を対比させながら、まとめたものである。表4の各相関値の絶対値に基づいて、年長児全体と小1全体の間で相関値の差の検定を行った。その結果、以下の相関値では年長児全体と小1全体の間には差が見られた。

まずソシオメトリック地位得点と仲間知覚尺度得点との相関値の差に関する結果を見ると、L得点とSC尺度得点間の正相関値では、年長児全体 ( $r = .835$ ) が小1全体 ( $r = .663$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.13$ ,  $p < .05$ )。L得点とWD尺度得点間の負相関値では、年長児全体 ( $r = -.374$ ) が小1全体 ( $r = -.048$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.82$ ,  $p < .10$ )。D得点とAG尺度得点間の正相関値では、年長児全体 ( $r = .878$ ) が小1全体 ( $r = .754$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.07$ ,  $p < .05$ )。SP得点とSC尺度得点間の正相関値では、年長児全体 ( $r = .766$ ) が小1全体 ( $r = .491$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.50$ ,  $p < .05$ )。平均評定値とAG尺度得点間の負相関値では、年長児全体 ( $r = -.736$ ) が小1全体 ( $r = -.542$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.78$ ,  $p < .10$ )。

次に、仲間知覚尺度得点同士の相関値の差に関する結果を見ると、SC尺度得点とWD尺度得点間の負相関値においてのみ、年長児全体 ( $r = -.314$ ) が小1全体 ( $r = -.021$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.73$ ,  $p < .10$ )。なお、ソシオメトリック地位得点同士の相関値では、いずれの相関値においても年長児全体と小1全体間に有意差は認められなかった。



(2) 男女別のデータに基づく同時的相関係数

男女別のデータに基づいて、L得点、D得点、SP得点、SI得点および平均評定値のそれぞれと仲間知覚尺度得点および孤独感得点との同時的関連を Pearson 積率相関係数によって示した。表5は年長児時点の男児(N=29)と女児(N=30)、小1時点の男児(N=29)と女児(N=30)の4群の結果を対比させながら、まとめたものである。表5の各相関値の絶対値に基づいて、4群間で相関値の差の検定を行った。その結果、以下の相関値では4群間に差

表5 各得点間の同時的相関係数

	指名得点			平均 評定値	仲間知覚尺度得点			孤独感 得点
	D	SP	SI		AG	SC	WD	
(1) 指名法の肯定的指名(L)得点								
年長男(N=29)	-.417*	.842***	.540**	.599***	-.315+	.816***	-.519**	
年長女(N=30)	-.403*	.838***	.549**	.632***	-.262	.851***	-.272	
小1男(N=29)	-.297	.764***	.491**	.632***	-.185	.590***	-.102	-.151
小1女(N=30)	-.460*	.814***	.343+	.566**	-.348+	.787***	-.018	-.263
(2) 指名法の否定的指名(D)得点								
年長男(N=29)		-.842***	.540**	-.843***	.838***	-.625***	.462*	
年長女(N=30)		-.837***	.544**	-.829***	.914***	-.299	-.140	
小1男(N=29)		-.843***	.686***	-.656***	.758***	-.074	.016	.179
小1女(N=30)		-.890***	.676***	-.815***	.759***	-.352+	.352+	.146
(3) 指名法の社会的好み(SP)得点								
年長男(N=29)			.000	.857***	-.685***	.856***	-.583***	
年長女(N=30)			.004	.872***	-.701***	.687***	-.079	
小1男(N=29)			-.187	.799***	-.616***	.383*	-.068	-.206
小1女(N=30)			-.266	.824***	-.675***	.634***	-.240	-.231
(4) 指名法の社会的影響力(SI)得点								
年長男(N=29)				-.226	.484**	.177	-.053	
年長女(N=30)				-.178	.595***	.507**	-.377*	
小1男(N=29)				-.117	.552**	.381*	-.063	.049
小1女(N=30)				-.393*	.514**	.281	.358+	-.064
(5) 評定法の平均評定値								
年長男(N=29)					-.733***	.746***	-.514**	
年長女(N=30)					-.742***	.585***	-.093	
小1男(N=29)					-.502**	.490**	-.271	-.145
小1女(N=30)					-.582***	.561**	-.552**	-.165
(6) 仲間知覚の攻撃性(AG)尺度得点								
年長男(N=29)						-.546**	.252	
年長女(N=30)						-.172	-.196	
小1男(N=29)						-.037	-.183	.313+
小1女(N=30)						-.315+	-.007	.118
(7) 仲間知覚の社会的コンピテンス(SC)尺度得点								
年長男(N=29)							-.497**	
年長女(N=30)							-.187	
小1男(N=29)							.067	.077
小1女(N=30)							-.091	-.222
(8) 仲間知覚の引っ込み思案(WD)尺度得点								
年長男(N=29)								
年長女(N=30)								
小1男(N=29)								.121
小1女(N=30)								-.081

+: p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01 \*\*\* : p < .001

が見られた。

まずソシオメトリック地位得点と仲間知覚尺度得点との相関値の差に関する結果を見ると、L得点とSC尺度得点間の正相関値では、年長児男児 ( $r = .816$ ) が小1男児 ( $r = .590$ ) よりも高い傾向にあり ( $z = 1.67$ ,  $p < .10$ )、年長児女児 ( $r = .851$ ) が小1男児 ( $r = .590$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.10$ ,  $p < .05$ )。L得点とWD尺度得点間の負相関値では、年長児男児 ( $r = -.519$ ) が小1男児 ( $r = -.102$ ) よりも高い傾向にあり ( $z = 1.72$ ,  $p < .10$ )、小1女児 ( $r = -.018$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.02$ ,  $p < .05$ )。D得点とAG尺度得点間の正相関値では、年長児女児 ( $r = .914$ ) が小1男児 ( $r = .758$ ) や小1女児 ( $r = .759$ ) よりも有意に高かった (順に  $z = 2.04$ ,  $p < .05$ ;  $z = 2.06$ ,  $p < .05$ )。D得点とSC尺度得点間の負相関値では、年長児男児 ( $r = -.625$ ) が小1男児 ( $r = -.074$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.37$ ,  $p < .05$ )。D得点とWD尺度得点間の相関値では、年長児男児 ( $r = .462$ ) が小1男児 ( $r = .016$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.74$ ,  $p < .10$ )。SP得点とSC尺度得点間の正相関値では、年長児男児 ( $r = .856$ ) が小1男児 ( $r = .383$ ) よりも有意に高く ( $z = 3.13$ ,  $p < .01$ )、小1女児 ( $r = .634$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.91$ ,  $p < .10$ )。SP得点とWD尺度得点間の負相関値では、年長児男児 ( $r = -.583$ ) が年長児女児 ( $r = -.079$ ) や小1男児 ( $r = -.068$ ) よりも有意に高かった (順に  $z = 2.15$ ,  $p < .05$ ;  $z = 2.16$ ,  $p < .05$ )。平均評定値とWD尺度得点間の負相関値では、年長児男児 ( $r = -.514$ ) や小1女児 ( $r = -.552$ ) が年長児女児 ( $r = -.093$ ) よりも高い傾向にあった (順に  $z = 1.73$ ,  $p < .10$ ;  $z = 1.92$ ,  $p < .10$ )。

次に、仲間知覚尺度得点同士の相関値の差に関する結果を見ると、AG尺度得点とSC尺度得点間の相関値では、年長児男児 ( $r = -.546$ ) が小1男児 ( $r = -.037$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.08$ ,  $p < .05$ )。SC尺度得点とWD尺度得点間の相関値では、年長児男児 ( $r = -.497$ ) が小1男児 ( $r = .067$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.72$ ,  $p < .10$ )。なお、ソシオメトリック地位得点同士の相関値では、いずれの相関値においても4群間に有意差は認められなかった。

#### 各得点間の縦断的関連

表6は、年長児時点の得点と小1時点の得点間の縦断的関連をPearson積率相関係数によって示したものである。表6の各相関値の絶対値に基づいて、男児 ( $N = 29$ ) と女児 ( $N = 30$ ) 間で相関値の差の検定を行った。その結果、以下の相関値では男女間に差が見られた。

まずソシオメトリック地位得点と仲間知覚尺度得点との相関値の差に関する結果を見ると、年長児時点のWD尺度得点と小1時点のL得点間の負相関値では、男児 ( $r = -.492$ ) が女児 ( $r = -.073$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.68$ ,  $p < .10$ )。また、年長児時点のWD尺度得点と小1時点のSP得点間の負相関値では、男児 ( $r = -.600$ ) が女児 ( $r = -.093$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.18$ ,  $p < .05$ )。さらに、年長児時点のWD尺度得点と小1時点の平均評定値間の負相関値でも、男児 ( $r = -.656$ ) が女児 ( $r = -.235$ ) よりも有意に高かった ( $z = 1.98$ ,  $p < .05$ )。

次に、年長児時点の仲間知覚尺度得点と小1時点の仲間知覚尺度得点との相関値の差に関する結果を見ると、AG尺度得点同士の正相関値では、女児 ( $r = .804$ ) が男児 ( $r = .559$ ) よりも高い傾向にあった ( $z = 1.75$ ,  $p < .10$ )。また、WD尺度得点同士の正相関値でも、女児

表6 各得点間の縦断的相関係数

小1時点	年長児時点					仲間知覚尺度得点		
	指 名 得 点				平 均 評 定 値	A G	S C	W D
	L	D	S P	S I				
(1) 指名法の肯定的指名 (L) 得点								
男児(N=29)	.543**	-.482**	.609***	.056	.494**	-.306	.502**	-.492**
女児(N=30)	.663***	-.434*	.655***	.212	.533**	-.268	.546**	-.073
全体(N=59)	.608***	-.454***	.632***	.142	.514***	-.284*	.527***	-.239+
(2) 指名法の否定的指名 (D) 得点								
男児(N=29)	-.166	.525**	-.410*	.333+	-.410*	.410*	-.190	.478**
女児(N=30)	-.359+	.603***	-.574***	.222	-.665***	.549**	-.393*	.085
全体(N=59)	-.271*	.567***	-.499***	.271*	-.548***	.493***	-.305*	.234+
(3) 指名法の社会的好み (S P) 得点								
男児(N=29)	.418*	-.627***	.620***	-.193	.555**	-.450*	.412*	-.600***
女児(N=30)	.575***	-.617***	.712***	-.037	.708***	-.497**	.537**	-.093
全体(N=59)	.504***	-.618***	.668***	-.104	.638***	-.478***	.483***	-.282*
(4) 指名法の社会的影響力 (S I) 得点								
男児(N=29)	.262	.112	.089	.347+	.002	.141	.209	.061
女児(N=30)	.171	.278	-.064	.411*	-.260	.358+	.038	.029
全体(N=59)	.215	.200	.009	.382**	-.135	.262*	.117	.042
(5) 評定法の平均評定値								
男児(N=29)	.399*	-.531**	.553**	-.122	.567**	-.437*	.462*	-.656***
女児(N=30)	.540**	-.521**	.634***	.020	.645***	-.402*	.592***	-.235
全体(N=59)	.475***	-.524***	.595***	-.044	.607***	-.416**	.534***	-.403**
(6) 仲間知覚の攻撃性 (A G) 尺度得点								
男児(N=29)	-.294	.603***	-.533**	.287	-.564**	.559**	-.400*	.362+
女児(N=30)	-.198	.762***	-.573***	.514**	-.559**	.804***	-.158	-.270
全体(N=59)	-.245+	.683***	-.553***	.403**	-.562***	.688***	-.274*	.005
(7) 仲間知覚の社会的コンピテンス (S C) 尺度得点								
男児(N=29)	.317+	-.275	.352+	.039	.386*	-.205	.386*	-.179
女児(N=30)	.616***	-.267	.528**	.321+	.475**	-.216	.622***	.027
全体(N=59)	.441**	-.270*	.423**	.158	.420**	-.206	.483***	-.073
(8) 仲間知覚の引っ込み思案 (W D) 尺度得点								
男児(N=29)	.113	-.187	.178	-.069	.062	-.200	.102	.420*
女児(N=30)	-.196	-.012	-.110	-.191	-.197	-.058	-.219	.786***
全体(N=59)	-.065	-.081	.010	-.135	-.088	-.110	-.088	.650***
(9) 孤独感得点								
男児(N=29)	-.214	.216	-.256	.001	-.257	-.027	-.259	.282
女児(N=30)	-.317+	.106	-.252	-.194	-.271	.028	-.255	.034
全体(N=59)	-.257+	.166	-.252+	-.084	-.262*	.000	-.253+	.150

+: p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01 \*\*\* : p < .001

( $r = .786$ ) が男児 ( $r = .420$ ) よりも有意に高かった ( $z = 2.22, p < .05$ )。

しかし、ソシオメトリック地位得点同士の相関値あるいは年長児時点の地位得点と小1時点の仲間知覚尺度得点との相関値では、いずれも男女差は認められなかった。なお、小1時点の孤独感得点と年長児時点の各得点との相関値においても、いずれも男女差は見られなかった。

## 考 察

## 各得点間の同時的関連について

表4と表5から、まずソシオメトリック地位得点同士の相関パターンを見ると、L得点はD得点と有意な負相関を示し、SP得点、SI得点および平均評定値とは有意な正相関を示している。逆に、D得点はSP得点や平均評定値とは有意な負相関を示し、SI得点とは有意な正相関を示している。また、SP得点は平均評定値と有意な正相関を示すが、SI得点はSP得点や平均評定値と明確な相関を示していない。相関値の大きさは多少異なるが、これらの結果は年長児時点と小1時点に共通し、男女間の差も見られない。これらの結果は、年齢時点や男女の相違にかかわらず、仲間から積極的に好かれる（L得点が高い）子どもほど、仲間から積極的に拒否されることが少なく（D得点が高い）、同性仲間全員から受容されやすい（平均評定値が高い）という関係にあることを示唆する。しかし、指名法のL得点とD得点は有意な負相関を示しているものの、これら2つの得点と平均評定値との相関値に比べるとかなり低いものであった。これは、L得点とD得点が必ずしも好き嫌いという同次元の表裏関係をあらわすものではなく、幼児期においてさえ仲間から積極的に好かれる理由と仲間から積極的に拒否される理由が質的に異なる可能性を示唆する。SP得点やSI得点はL得点とD得点から合成された得点であることから、その構成得点であるL得点やD得点がSP得点やSI得点と高い相関を示すことは十分に予想されることである。しかし、その合成得点の1つであるSP得点は平均評定値と高い有意な正相関を示し、平均評定値と同様に仲間からの好意度のような一次的な側面を捉える傾向にあるといえる。それに対して、SI得点は平均評定値やSP得点とは明確な相関を示さず、SI得点とSP得点は相互に独立の側面を捉えていることがわかる。

次に表4と表5から、ソシオメトリック地位得点と仲間知覚尺度得点との相関パターンを見ると、全般に年長児時点の相関値は小1時点の相関値よりも高い傾向にあった。事実、相関値の絶対値に有意差ないし有意差傾向がある場合はほとんどすべて年長児全体（表4参照）ないしは年長児時点の男女いずれか（表5参照）の相関値が大きかった。本研究の年長児は年中児時点から同一クラス編成の2年目を経験しているのに対して、小1は新しいクラスの仲間と約8か月間の接触経験しかもたない。年長児では同一の仲間集団と長期間にわたる相互作用経験を通して、仲間内地位が確立したり、仲間の社会的行動特徴を知る機会を多く得ていたと解釈できる。しかし、仲間相互作用の量や機会の相違によっても、本研究の結果は同一クラスの仲間と長期的な相互作用経験をすれば、少なくとも幼児でも仲間の地位や社会的行動特徴について信頼性の高い情報を提供できることを実証するものといえる。

表4と表5から、2つの年齢時点や男女に共通するソシオメトリック地位得点と仲間知覚尺度得点との相関パターンを見ると、まずL得点はSC尺度得点と有意な高い正相関を示すのに対して、D得点はAG尺度得点と有意な高い正相関を示している。これは、仲間から積極的に好かれる子どもほど社会的コンピテンスに優れ、仲間から積極的に拒否される子どもほど攻撃性が強い関係にあることを示している。これらの結果は、幼児を対象とした他の研究結果（前田, 1994; 前田・片岡, 1993）とも一致している。幼稚園年中児から小1までの年齢段階を通して、仲間から好かれる要因は社会的コンピテンスに優れ、協調性や友好性を発揮することであり、仲間から拒否される要因は攻撃性を示すことであると示唆される。

L得点やD得点と比べると、平均評定値は3つの仲間知覚尺度得点とも有意な相関パターンを示しやすかった。年長児時点と小1時点に共通して、仲間から受容される子どもほど攻撃性が少なく、社会的コンピテンスに優れ、引っ込み思案傾向が少ない関係にあった。これらの結果は指名法のL得点やD得点と関連する社会的行動特徴パターンの結果と異なっている。この点からも、平均評定値は仲間からの一般的受容度をあらわす指標であることが示唆される。要するに、本研究の結果は指名法のL得点およびD得点と関連する社会的行動特徴パターンに相違があるだけでなく、これら両得点の相関パターンは平均評定値の社会的行動特徴との相関パターンとも異なることを実証した。

最後に、仲間知覚尺度得点同士の相関パターンを見ると、年長児時点ではSC尺度得点がAG尺度得点やWD尺度得点と低い有意な負相関を示している(表4参照)。それに対して、小1時点では3つの仲間尺度得点相互の相関は無相関に近い。これは、表1と表2の因子分析の結果から予想されるように、3つの仲間知覚尺度得点が年長児時点では完全に独立していないのに対して、小1時点では3つの尺度得点が比較的独立していたからではないかと考えられる。幼児は社会的コンピテンスを中心に捉え、それと連動した未分化な見方で攻撃性や引っ込み思案の行動特徴を捉える傾向にあるのに対して、小1は3つの社会的行動特徴の側面を比較的分化した見方で捉え始めているのかもしれない。なお、孤独感得点はAG尺度得点と最も高い正相関を示していた(表4参照)が、それは主に男児の結果(表5参照)によるところが大きかった。

#### 各得点間の縦断的関連について

表6から、まず同一得点同士の2年間にわたる縦断的関連はすべて有意な正相関を示した。これらの結果から、男女共通して、年長児時点から小1時点にかけてソシオメトリック地位得点だけでなく、仲間知覚尺度得点の安定性も高いことがわかる。一般に、幼児の地位や社会的行動は日々変化しやすいと見られやすいが、本研究の結果は1年間の期間においても、彼らの地位や社会的行動特徴にはかなりの一貫性があることを示している。ソシオメトリック地位得点も仲間知覚尺度得点も多く仲間から収集した情報を集約したものである。したがって本研究の結果は、少なくとも多数の仲間情報を集約すると、幼稚園の年長児時点で得られた仲間の地位や社会的行動特徴に関する情報から、1年後の地位や社会的行動特徴を予測することがある程度可能であることを実証するものである。

表6から男女全体のデータに基づいて、ソシオメトリック地位得点同士の相関値を取り出すと、SP得点( $r = .668$ )、L得点( $r = .608$ )、平均評定値( $r = .607$ )、D得点( $r = .567$ )、SI得点( $r = .382$ )となる。それに対して、本研究と同じ移行期の子どもを対象としたVitaro, Gagnon, & Tremblay (1990)では、SP得点( $r = .50$ )、L得点( $r = .41$ )、平均評定値( $r = .34$ )、D得点( $r = .45$ )、SI得点( $r = .23$ )の各相関値を得ている。これら2つの研究結果を比較してわかるように、いずれの得点の相関値も本研究の方が高い。本研究の相関値は、児童を対象としたTerry & Coie (1991)やCoie & Dodge (1983)の1年間の相関値よりも高いか、あるいはそれらの相関値に匹敵する値を示している。Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990)の幼稚園児は小学校にある最年少クラスであり、その多くが小学校の1年生クラスに進級している。この点では、本研究も同様である。したがって、学年全体の集団メンバーの構成変化の程度が本研究と彼らの研究で大きく異なるとは考えにくい。おそ

らく、これも本研究の年長児が年中児時点から同一クラス編成の2年目を経験していることと関連しているのではないかと考えられる。本研究では年中児から年長児にかけて同一クラスを経験しているので、年長児時点の11月に測定したソシオメトリック地位得点がクラス内の地位をより明確に測定していたのであろう。この解釈は、本研究と同様に同一クラスの年中児時点から年長児時点にかけての安定性係数を調べた前田(1989)の結果が、前田(1989)よりも短い期間で安定性係数を求めた他の研究結果(たとえば、Poteat, Ironsmith, & Bullock, 1986; Wasik, 1987)と匹敵することからも裏付けられる。その意味で、本研究の結果は、幼児期のソシオメトリック地位得点から1年後以降の地位得点を予測する場合には、1回目のソシオメトリック測定を集団メンバーの仲間関係が確立した時期に実施することによって、予測力が高まる可能性を示唆するものである。

ソシオメトリック地位得点同士の相関値と比べると、仲間知覚尺度得点同士の相関値ではAG尺度得点やWD尺度得点に見られるように、男児よりも女児の安定性が有意に高いか高い傾向にあった。これは、女児の方が男児よりも実際に一貫した社会的行動特徴を示しやすいのか、それとも仲間の見方は女児の方が一貫しやすいのか、のいずれかを示すものと考えられる。ところが、年長児時点のWD尺度得点と小1時点のL得点、SP得点および平均評定値との負相関では、いずれも男児の相関値が女児の相関値よりも有意に高いか高い傾向にあった。WD尺度得点に関する相関値に焦点を絞ると、これらの相関値における男女差の方向の相違はどのように解釈すべきであろうか。表5の同時的相関パターンを年長児時点の男女間で比較すると、WD尺度得点とL得点、SP得点および平均評定値との負相関は、表6と同様に、いずれも男児の相関値が女児の相関値よりも高く、特に女児では無相関に近い値を示している。この結果を組み合わせると、女児の引っ込み思案傾向は地位とあまり関連しないが、2年間にわたる引っ込み思案傾向それ自体の一貫性は女児の方が男児よりも高いと考えられる。それに対して、男児の引っ込み思案傾向は比較的变化しやすいが、年長児時点から引っ込み思案傾向を示す男児は同時期の地位と関連するだけでなく、1年後の新しい仲間集団においても仲間から好かれることが少なく、拒否されやすく、受容されにくい状態になりやすいと解釈できよう。

同時的関連の場合ほど顕著ではないが、男女共通して、年長児時点のSC尺度得点は小1時点のL得点と有意な正相関を示し、年長児時点のAG尺度得点は小1時点のD得点と有意な正相関を示した。逆に、年長児時点のL得点は小1時点のSC尺度得点と正相関を示し、年長児時点のD得点は小1時点のAG尺度得点と有意な正相関を示した。前者の結果は、前年度から攻撃性を強く示す子どもほど1年後に仲間から拒否されやすいこと、前年度から社会的コンピテンスに優れている子どもほど1年後に仲間から好かれることを予測するものである。これは社会的スキルや対人行動が現在および将来の仲間適応に影響するという見解(たとえば、Parker & Asher, 1987)と一致するものである。後者の結果は、いったん仲間内地位が決定し仲間内評判が確立すると、簡単に地位や評判を変えることが難しく、地位や評判と一致した行動をとりやすいという見解(たとえば、Hymel, Wagner, & Butler, 1990)と一致し、地位や社会的行動特徴の持続性や一貫性を強める仲間評判のバイアス効果を反映したものであると考えることができる。

なお、表4と表6の男女全体のデータに基づく相関値を比較すると、小1時点の孤独感得点は同時期のAG尺度得点と正相関の傾向にあったが、その他の得点とは明確な相関を示していない(表4参照)。それに対して、小1の孤独感は前年の年長児時点におけるL得点、SP得

点、SC尺度得点と有意な負相関の傾向を示し、平均評定値とは有意な負相関を示している。このことから、1年前の年長児のときに仲間から好かれ受容され、社会的コンピタンスに優れていた子どもほど、小1になってから孤独感を感じない傾向にあることが示唆される。孤独感とは仲間関係の長期にわたる累積的影響の結果として生じる可能性を示唆するものである。本研究の子どもたちは、年長児時点から小1時点にかけてクラス編成がなされ、小1時点では新しい仲間集団に参加した。もし同一クラスが2年間以上にわたって継続していたならば、孤独感に及ぼす仲間関係の累積的効果がもっと顕著に見られたことであろう。しかし、小1時点において仲間から攻撃的であると見られている子どもほど、孤独感を感じやすいという同時的関連から示唆されるように、否定的な仲間関係を作りだし、その結果として孤独感を生じさせるような否定的な対人行動（たとえば、攻撃性）を改善することが何よりも大切であると思われる。

## 要 約

本研究では幼稚園の年長児時点と小学1年生時点の両調査データが揃っている子ども59名（男児29名と女児30名）を対象にして、ソシオメトリック地位得点、仲間知覚尺度得点および孤独感得点の同時的関連と1年間をはさんだ縦断的関連について検討した。主な結果は以下のとおりであった。

①ソシオメトリック地位得点同士の同時的関連では、男女共通して、L得点はD得点と有意な負相関を示し、SP得点、SI得点および平均評定値とは有意な正相関を示した。逆に、D得点はSP得点や平均評定値とは有意な負相関を示し、SI得点とは有意な正相関を示した。また、SP得点は平均評定値と有意な正相関を示したが、SI得点はSP得点や平均評定値と明確な相関を示さなかった。

②ソシオメトリック地位得点と仲間知覚尺度得点との同時的関連では、L得点はSC尺度得点と有意な高い正相関を示したが、D得点はAG尺度得点と有意な高い正相関を示した。また、平均評定値は3つの仲間知覚尺度得点とも有意な相関パターンを示しやすかった。

③年長児時点から小1時点にかけての縦断的関連では、同一のソシオメトリック地位得点同士や同一の仲間知覚尺度得点同士の安定性は高かった。

④同時的関連の場合ほど顕著ではなかったが、年長児時点のSC尺度得点は小1時点のL得点と有意な正相関を示し、年長児時点のAG尺度得点は小1時点のD得点と有意な正相関を示した。逆に、年長児時点のL得点は小1時点のSC尺度得点と正相関を示し、年長児時点のD得点は小1時点のAG尺度得点と有意な正相関を示した。

⑤小1時点の孤独感得点は小1時点のAG尺度得点と同時的関連を示す傾向にあった。それに対して、小1の孤独感の縦断的関連では、前年の年長児時点におけるL得点、SP得点、SC尺度得点と有意な負相関の傾向を、平均評定値とは有意な負相関を示した。

学年の移行期である幼稚園の年長児から小1にわたるソシオメトリック地位や社会的行動特徴の同時的関連性や縦断的安定性がかなり高いことから、幼児期でも多数の仲間から得られた情報を集約すると、仲間の地位や社会的行動特徴について信頼性の高い情報を提供できること、また1年後の地位や社会的行動特徴についても予測力の高い情報を提供できることが確認された。

## 引用文献

- Asher, S. R., & Wheeler, V. A. 1985 Children's loneliness: A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 500-505.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst(Ed.), *Annals of child development*. Vol.2, pp.251-297. Greenwich: JAI Press.
- Hymel, S., Wagner, E., & Butler, L. J. 1990 Reputational bias: View from the peer group. In S. R. Asher & J. D. Coie(Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp.156-186. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤監訳 1996 子どもと仲間の心理学-友だちを拒否するところ- pp.158-186. 北大路書房
- Kupersmidt, J. B., Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1990 The role of poor peer relationships in the development of disorder. In S. R. Asher & J. D. Coie(Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp.274-305. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤監訳 1996 子どもと仲間の心理学-友だちを拒否するところ- pp.264-293. 北大路書房
- Ladd, G. W., & Asher, S. R. 1985 Social skill training and children's peer relations. In L. L'Abate & M. A. Milan(Eds.), *Handbook of social skills training and research*. pp.219-244. New York: Wiley.
- 前田健一 1989 幼児の仲間関係に関する研究-ソシオメトリック選択の性別偏好と安定性の検討- 愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 第7号, 63-78.
- 前田健一 1994 幼児の仲間関係に関する研究-社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメントの地位群間比較と下位群間比較- 愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学 41, 1, 71-88.
- 前田健一 1995 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, 43, 256-265.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント教育心理学研究, 41, 152-160.
- Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. 1983 Social impact and social preference as determinants of children's peer group status. *Developmental Psychology*, 19, 856-867.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- Oden, S., & Asher, S. R. 1977 Coaching children in social skills for friendship-making. *Child Development*, 48, 495-506.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. 1987 Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- Poteat, G. M., Ironsmith, M., & Bullock, J. 1986 The classification of preschool children's sociometric status. *Early Childhood Research Quarterly*, 1, 349-360.
- Terry, R., & Coie, J. D. 1991 A comparison of methods for defining sociometric status among children. *Developmental Psychology*, 27, 867-880.
- Vitaro, F., Gagnon, C., & Tremblay, R. E. 1990 Predicting stable peer rejection from kindergarten to grade one. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19, 257-264.
- Wasik, B. H. 1987 Sociometric measures and peer descriptors of kindergarten children: A study of reliability and validity. *Journal of Clinical Child Psychology*, 16, 218-224.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園と附属小学校の先生方並



## 幼稚園児と小1の仲間内地位に関する同時的・縦断的関連要因

びに幼児・児童の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては井伊三奈さん、市村佳代子さん、河野寿子さん、白石梓さん、土佐香織さん、二神華子さん、三原佳美さん、山田恭子さん、渡邊知美さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。